

特 集

——シンポジウム2「ヴィクトリア朝イギリスの家族——周縁的家族とく親子離隔>」

奴隷貿易廃止と親子離散

——シエラレオネにおける解放アフリカ人の記録から——

並河 葉子 (神戸市外国語大学)

はじめに 奴隷制および奴隷制の親子の離散

奴隷制は親子離隔と不可分の制度である。18世紀末から反奴隷制運動が大きく盛り上がったイギリス社会では、奴隷貿易や奴隷制に反対する人びとが様々なメディアを通じて反奴隷制のキャンペーンを展開したが、その中で「家族」や「親子」が強制的に隔離されてしまう状況も批判の対象となった。

奴隷貿易は、親子関係とは無関係にアフリカ人を奴隷として遠く離れた場所へ強制的に運ぶことから始まる。そして、彼らが無事に目的地に到着して、もし家族を形成することができたとしても、親子関係や夫婦関係にかかわらず売買の対象とされることも珍しくなかった。

近年、奴隷貿易や奴隷制プランテーションの実態についてオンラインデータベースの公開が相次いでいる。奴隷貿易廃止運動の一環として、イギリス海軍が中心となり、大西洋上で拿捕した奴隷貿易船から解放された奴隷たちの記録の整理も進んでおり、奴隷貿易に相当数の子どもたちが含まれていたことが明らかになってきている。ここからは、イギリスの奴隷貿易廃止後も、親子の離散が継続していたことが分かってきた。以下では、こうしたオンライン資料に依拠しながら、イギリスにおいて奴隷貿易が廃止される時期、奴隷貿易船から解放されたアフリカ系の人たちが経験した親子離散の実態を、シエラレオネに残された記録を手掛かりに考える。

西アフリカのシエラレオネは、イギリスで反奴隷制運動を牽引したアボリションистたちが「自由の土地 (Province of Freedom)」建設をスローガンに構想したことをきっかけに、1787年から植民地建設が開始された。当初

は在英黒人と白人売春婦が送り込まれたが、その後、アメリカ独立戦争でイギリス側の兵士として戦い、敗れて寒冷なカナダのノヴァスコシアに住んでいた元奴隷たちがやってきた。1808年にはイギリスの直轄植民地となり、1860年代までは奴隷貿易船から解放された解放アフリカ人(Liberated African)を受け入れる拠点となっていた。解放アフリカ人の一部は、その後さらにイギリス領西インド植民地¹に徒弟や兵士などとして送られることもあった。

シエラレオネでは、反奴隷制運動に連動したソーシャル・リフォーム運動のひとつである初等教育の普及運動が同時に進行していた。ここでは、アポリシヨニストたちが目指す理想の社会を追求するために行われたソーシャル・リフォームによって救済対象とされた奴隷たちにとっての現実を、親子の離散をキーワードに検証する。

1. イギリスにおけるソーシャル・リフォームと反奴隷制運動

1780年代からの反奴隷制運動は、イギリス本国におけるソーシャル・リフォームの一つである。この運動の中には反奴隷制運動だけでなく、刑務所改革運動やキリスト教ミッション運動、初等学校教育運動など国内外での幅広いソーシャル・リフォームを目指す運動が含まれている。また、多くの運動において中核的な推進者であった人びとは重なっている。福音主義者ともよばれるかれらは、キリスト教的価値規範に基づいた社会の実現を目指していた。代表的な人物として、反奴隷制運動のリーダーとして著名な国教会福音派のウィリアム・ウィルバーフォースやトマス・クラークソン、ハナ・モアのほか、クエーカーのエリザベス・フライ、ジェイムズ・ステイーヴン、ユニテリアンのジョサイア・ウェッジウッドなどが挙げられる。イギリスにおける反奴隷制運動は、イギリスにおけるソーシャル・リフォームにおいて重要な運動である。この運動が、国内外のソーシャル・リフォームの結節点となり、様々な運動にかかわる人びとをつなげる役割も果たしていたからである。反奴隷制運動が福音主義的なソーシャル・リフォームの一つであったことから、この運動においても「家族」は一つのキーワードとなり、奴隷たちの家族や母子関係に関心が寄せられるようになった。

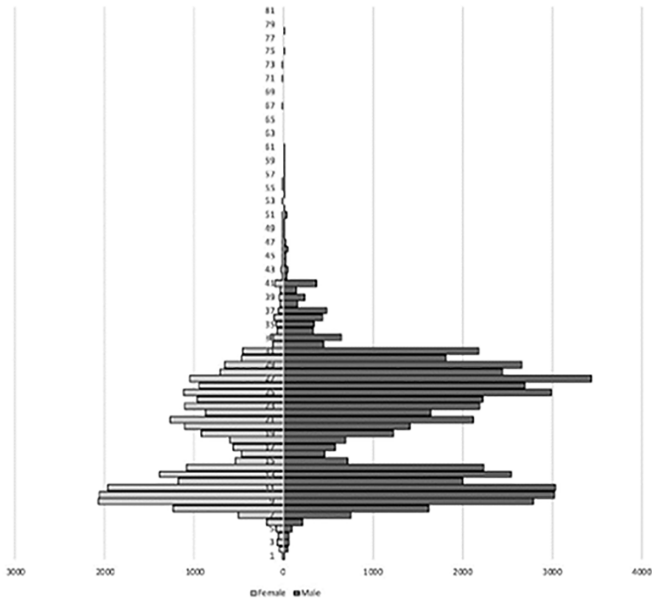
イギリス議会では、1807年に奴隷貿易廃止法案が可決された。この法案では、違法な奴隷貿易船から解放された奴隷たちは、成人であるか否かにかかわらず、徒弟（apprentice; 年季は最長14年まで）とするか、海軍に入隊させることが定められている²。シエラレオネに関しては、前総督であったアポリシヨニストのザカリ・マコーレイが1807年5月1日、現総督のルドラムにあてて、シエラレオネの子どもたちについて、「現地の人びと（native）を7年未満または21歳まで徒弟とするのは、この地に文明をもたらすもっともよい方法である³」と述べていることからわかる通り、「徒弟制」は「文明化」の手段と考える人もいた。実際、現地の親が子どもを教育のためにシエラレオネ植民地にいるノヴァスコシアから来たアフリカ系住民の元に徒弟に出すこともあった⁴。

2. 奴隷貿易廃止と解放アフリカ人

ところで、解放アフリカ人たち（Liberated Africans）とは、どのような人びとなのだろうか。

イギリスは1807年に自国の奴隷貿易を廃止した後、各国と二国間条約を締結し、海軍を動員して大西洋およびインド洋において奴隷の密貿易取り締まりを開始した。大西洋上では1808年から1860年代まで、インド洋海域を加えた場合は、1896年までの間に多くの奴隷が海上で拿捕された船から救出された。その後解放された奴隷たちを「解放アフリカ人（Liberated Africans）」と呼ぶ。ところで、新大陸の奴隷制においては、様々な理由で奴隷身分から解放される奴隷たちがそれまでも存在した。しかし、本稿で「解放アフリカ人」として扱うのは、イギリスの奴隷貿易廃止後に、奴隷貿易船から解放された人びとに限定している。

救出された奴隷たちは、海上からいくつかの拠点にまず移送された。その最大の受け入れ先となったのが、西アフリカのシエラレオネのフリータウンである。ほかにハバナ、リオデジャネイロ、トルトラ（現ヴァージン諸島）、ケープタウン、ジェイムズ・タウン（セント・ヘレナ）、ルアンダ（アンゴラ）、ポートルイス（モーリシャス）が受け入れ地となっていた。現在、解放アフリカ人の受け入れ先に残された裁判記録のデータベース化が進められており、*Liberated Africans*（解放アフリカ人）というタイトルのもと、



(図1) 1808年から1848年までにフリータウンに上陸した男女別の解放奴隷の数
 出典：Anderson, Richard (2022), ‘Abolition’s Adolescence: Apprenticeship as ‘Liberation’ in Sierra Leone, 1808-1848’, *English Historical Review*, 137 (586), p. 792.

順次オンラインで公開されるようになってきている⁵。

図1は、1848年までにシエラレオネのフリータウンに移送された解放アフリカ人を、男女、年齢別に示したものになる。ここからも明らかなように、解放されたひとたちの中には相当数の子どもたちが含まれていた。イギリス海軍は1808年から1864年までの間に16万4千人以上を大西洋上で拿捕した奴隷貿易船から解放し、そのうち9万9千人をシエラレオネに移送した。ここには3万5千人の子どもが含まれており、1807年以降を「子ども奴隷」の時代とも呼ぶこともある⁶。このように、19世紀にはいと奴隷貿易で取引された奴隷の中で、子どもたちの割合が着実に増加していた。奴隷船の出航地によっても異なるが、たとえば、ビアフラ湾の場合、18世紀第3四半期で2割程度、19世紀第1四半期で3割程度であったものが、4割弱まで上昇した⁷。

1801年から1864年までの間では男性42.5%、女性16.9%、少年25.2%、少女15.4%となっている。推計値ではあるが、17世紀の場合、少年は8.4%、少女は4.0%、18世紀はそれぞれ12.7%と7.6%であったのと比べて明らかに、子どもたちの割合が高くなっている⁸。これは、この時期、ブラジルなどのコーヒープランテーションの発展で、子どもの労働力も期待されるようになったことも一因とされている⁹。

ただし、母親と一緒に移動する乳児を除くと、日常生活において親ないし大人の世話が必要な5歳以下の幼い子どもたちが取引されることは少なかった。奴隷狩りやその後の奴隷取引では、親子関係が考慮されることなく、成人も子どももそれぞれが「商品」として扱われたが、そこで価値を決めるのは「労働力」としての質や将来性であった。「子ども」の年齢区分については後述する。奴隷貿易で「商品」として取引された人びとは、乳児と幼い子ども（おおむね5歳以下）を除けば家族や親子の離散を必然的に経験することになったが、奴隷貿易業者たちがその事実に関心を向けることはなかった。

3. サミュエル・アジャイ・クラウザの物語とシエラレオネ植民地の解放アフリカ人

シエラレオネはアボリショニストたちが1787年から‘Province of Freedom’をスローガンに開拓、建設を開始した植民地である。当初は在英黒人貧困層と白人売春婦がイギリスから入植し、その後は西インドやアメリカ植民地から、アメリカ独立戦争に参加したのちに解放され、ノヴァスコシアに移送された黒人たちが入植した。アボリショニストと関係の深い国教会伝道協会(CMS)が1804年以降最初の活動を開始した場所でもある。CMSが活動の開始当初より学校を開設していたことから明らかなように、文明化の使命を実践する場所という役割を担っており、1808年以降は解放アフリカ人の多くが移送される場所となった。

解放アフリカ人たちは、その後どのような人生をたどったのだろうか。また、彼らをめぐるイギリスの対応を、当時のイギリス人自身はどのように認識していたのだろうか。まずは、当時のイギリスでもっともよく知られた解放アフリカ人の一人、サミュエル・アジャイ・クラウザについて概観

しながら考えてみる。

サミュエル・アジャイ・クラウザは、19世紀なかばのイギリスでもっとも有名なアフリカ出身の宣教師である。西アフリカのヨルバ地域（現在のナイジェリア南西部）で1809年頃に生まれ、12,3歳ごろに奴隷として連れ去られた後、1822年にイギリス海軍によって解放された。シエラレオネのミッションが運営する学校で教育を受け、1825年に受洗、26年にはイングランドでアフリカでのキリスト教布教に必要な神学について学んだ後、再びシエラレオネに戻り、1827年にはサハラ以南のアフリカではじめての高等教育機関として創立されたファーラーベイ・カレッジの一期生となった¹⁰。同校を卒業してからは、シエラレオネを拠点にキリスト教教育や布教を行っていた。1841年にCMSが行ったニジェール探検にも参加した後、1842年には再び渡英し、ロンドンのCMSの宣教師養成機関、イズリントン・カレッジで学び、イングランド国教会の聖職者となった。その後もCMSの宣教師として西アフリカ地域で活躍し、1864年にイングランド国教会ではじめてのアフリカ人主教となった。それから、1891年に亡くなるまでの長い間、現在のナイジェリアを中心とする西アフリカ地域で行われたCMSのミッションに大きな足跡を残した¹¹。

クラウザについては、1852年にイギリスで子ども向けのトラクトが発行され、異教の地である西アフリカで宣教活動を行う彼自身の活躍が紹介されている¹²。この物語のなかで強調されているのが、奴隷狩りや奴隷貿易に加担する野蛮な勢力から「かわいそうな」人びとを救う、人道的な「キリスト教国」イギリスである。クラウザは、奴隷狩りのあとポルトガル商人の手によって奴隷船に乗せられていたところをイギリス海軍によって救出された。彼の物語のなかでもう一つ重要なテーマとなっているのが「家族」である。彼は奴隷狩りによって家族の離散を経験したが、ニジェール探検の際に母親との再会を果たした。19世紀のイギリスにおいてもっとも有名な黒人の一人であったクラウザの物語では、奴隷貿易の野蛮さを示すものとして家族が強制的に突然引き離される悲劇が描かれた後、家族の感動的な再会をイギリスが進める西アフリカ地域のキリスト教布教の結果として描くことで、人道的なイギリスが進める「文明化の使命」を象徴的に示しているのである。

クラウザは奴隷船から解放されてシエラレオネにやってきた9万人以上にのぼる人びとのうちのたった一人にすぎない。彼が解放アフリカ人としてシエラレオネに移送されてからの一生は、子ども向けのトラクト以外にも宣教活動を伝える報告書などからかなり詳しく知ることができる。しかし、これはあくまで例外であり、多くの解放アフリカ人たちのその後については、ほとんど知られていない。実は、解放アフリカ人をめぐる資料は、いくつか存在する。その一つが、先に触れた *Liberated Africans* というオンラインデータベースであり、海上で拿捕された奴隷船から救出された人びとについて、移送された先の裁判所に残された記録である。彼らは裁判所で一人ずつ登録され、解放に値するのかどうか審査された。登録内容は時期や登録地によっても少しずつ異なるが、基本的に名前(アフリカ名)、性別、年齢(推測)、身長、その他身体的特徴などである。そのほか、とくに1810年代半ばごろまでは、引受先(disposal)として、かれらが植民地当局の管理を離れた方法と時期などが記載されている¹³。

このデータベース上にある記録を少し詳しく見てみよう。1810年の4月3日に奴隷を乗せて出港した奴隷船のドリス号は、1810年4月10日に海上で拿捕され、4月21日にシエラレオネに到着した。ここで解放され、登録された58名のうち、植民地に定住と記された3名を除く55名が4月26日には徒弟として様々な受け入れ先に引き取られたことが記されている¹⁴。記録をたどると、シエラレオネ当局が、解放アフリカ人の受入れが始まった当初数年は、上陸時点だけでなく、解放された人のその後を継続的にモニターしながら、植民地の人口構成の変化を記録しようとしていたことが分かる。こうした裁判所の記録のほかに、シエラレオネに拠点を置いていたCMSをはじめとするミッションの資料もある。異なる資料に同一の人物の記録が残っている可能性が高いが、アフリカ名で記載されているものとヨーロッパ名で記載されているものがあるため、現在、デジタル化と並行して裁判記録とミッションの記録の照合、名寄せが行われている¹⁵。

いずれの資料にも多くの「子ども」の記載がある。ここでいう子どもたちは、おおむね思春期に差し掛かる前、13歳から14歳までを指す。子どもの定義は他にもあり、たとえば18世紀末のイギリスは、身長130センチ(4フィート4インチ)以下を子どもとしてその取引を禁じている。アン

ゴラでは男女ともに0歳から7歳まで、少女の場合7歳から13歳または14歳、少年は7歳から14歳または15歳までに区分している。また、少年と少女のバランスは地域によっても異なるが、一般的にアフリカ社会では農業労働を女性が担うことも多かったことや、同じくアフリカ出身の奴隷を取引していたイスラム圏では少女や女性が好まれたこともあり、大西洋奴隷貿易においては男性に比べて女性が少なかった¹⁶。

解放された人は具体的にどのような人であったのか、先の1810年の資料よりも保存状態のよい1820年の資料の内容を、「子ども」に注目して確認してみよう。1820年2月19日にシエラレオネに到着したフランス船籍のマリー号からは、男性18名、女性14名、少年30名、少女27名の90名が解放された。未成年とされた人の割合が半数以上である¹⁷。この記録には、名前とそれぞれの推定年齢が記されている。それによれば、この船の場合、成人と未成年の境界は、少年とされているのは5歳から14歳、少女とされているのは7歳から12歳となっている。15歳以上は男性とされているが、この船に乗っていた女性の最低年齢17歳と少女の最高年齢12歳の間に開きがあるため、女性と少女の切れ目がどこにあるのかは、この記録からは明確ではないが、他の記録などを参照すると、女性の場合も子どもは14歳以下であったことが分かる。

子どもたちは親や親族から引き離されて取引されることが多かったため、子どもと母親のケアが必要な乳幼児は区別され、大西洋奴隷貿易においては2歳から5歳の子どもたちは非常に少ないのは先述した通りである¹⁸。2歳以下の子どもは母親と一緒に取引されることがあった。6歳以上でも家族全員が同じ奴隷船で大西洋を渡った事例もあるが、この場合は、基本的に親子、親族関係は考慮せずに子どもたちだけで取引された¹⁹。マリー号の記録でも、親子関係についての記載は見当たらない。また、マリー号の記録は、先ほど挙げた1810年のドリス号の記録とは違って、登録された人びとのその後についての記載はない。

1820年代になると、マリー号の事例だけでなく、解放アフリカ人のその後についての記載がない記録が増えてくるが、彼らの多くはそれまでと同様、徒弟となるか、男性や少年の多くは軍に入隊した。ハワードによれば、1827年に解放された1100名以上のアフリカ人のうち、3分の1はイギリス

海軍や西インド連隊など、何らかの軍に入隊したことが分かっている²⁰。一方、女性は強制的に結婚させられることもあった²¹。また、1838年にイギリス領の元奴隷の徒弟終了後は、西インド側のプランターたちが徒弟として解放アフリカ人の移送を要望しており、実際に相当数が西インドに向かうことになった²²。

徒弟期間は、19世紀初頭のイギリス本国では一般的には7年とされていたが、シエラレオネの場合、7年を超えることも珍しくなかった。また、イギリス本国では8歳以下の子どもが徒弟とされることは稀であったが、シエラレオネの解放アフリカ人の場合、7歳で徒弟とされることもある。基本的には、幼い子どもであっても解放アフリカ人としてシエラレオネに移送されると、そのあとは徒弟となった²³。徒弟制については、徒弟制によって解放アフリカ人が結果的に奴隷と変わらない不自由な状況に置かれているのではないかという疑念が長く続いた。軍への入隊と並んで、アフリカ人たちをすぐに解放するのではなく、「文明化」するための時間を確保するための手段として有効性を評価する人びととの間で論争があったが、結局19世紀前半を通じて子どもたちは徒弟とされた²⁴。イギリス本国の場合と異なり、奴隷船から解放された子どもたちには養育してくれる「家族」がいなかったためである。彼らを一時的に保護した当局にとっては、彼らの身元引受人を探し、自分たちの手から離すことが常に大きな課題であり、裁判所の記録などからは、徒弟として引き受けてくれる人びとに一刻も早く手渡そうとしていたことがうかがわれる²⁵。一方、子どもたちを徒弟として引き受けた人びとにとって、徒弟はさまざまな仕事をさせるための貴重な労働力であった。徒弟は、商人や職人だけでなく農民などあらゆる種類の労働を担った。徒弟制の終了にあたっては、決定打となったのは人道上の配慮ではなく、奴隷解放に伴って西インド植民地で生じていた労働力不足など経済的な要因が大きかったと指摘されている²⁶。

4. 文明化の実験場としてのシエラレオネ社会

解放奴隷たちが上陸したシエラレオネとはどのような場所だったのだろうか。また、そこで解放奴隷たちはどのような生活を送っていたのだろうか。シエラレオネ社会の人口は1821年にはおよそ15000人であるが、このうち

解放アフリカ人は8000人弱であった。中心都市のフリータウン周辺の村落に在住する人も増えており、男性が2500人、女性1300人、少年900人、少女800人程度となっている。また、目を引くのは、シエラレオネ全域に多数の学校が存在しており、成人、未成年ともに多くが学校に通っていたことである²⁷。1820年当時、CMSの報告書によれば、シエラレオネ全域の35校に3253人の生徒がいたとされているが、これはインドなども含めた当時のCMS全体の学校数226校、生徒数12551人の4分の1を占めている。学校は成人向けの夜間学校と子どもたちが通う昼間の学校があり、1822年時点での在籍者は夜間学校が男女合わせて1262人、昼間の学校は少年が1077人、少女が914人であった²⁸。

シエラレオネのミッションにおいて学校建設が重視されたのは、学校に文明化の推進装置としての役割が期待されていたからである。19世紀初頭は、イギリス本国においても聖書教育を中心とした基礎教育を普及させる動きが顕著になるが、シエラレオネをはじめとするイギリスの植民地においても同様であった²⁹。

植民地の学校で教えられる内容は、イギリス本国とまったく同一であった。19世紀初頭のイギリスでは、ジョセフ・ランカスターなどが編み出した、多くの生徒を効率的に教えることができる助教法が急速に普及していったが、植民地でも同じ方法によって、イギリス本国で使われている教材を使いながら基礎的な読み書き、簡単な計算と聖書が教えられていた。イギリス国内と海外でのこうした活動を支援していたのは、正しい聖書理解に基づくキリスト教的社会の実現という、当時のイギリス本国の福音主義者たちの理念を実現するために設立されたイギリス海外聖書協会 (British and Foreign Bible Society: BFBS) やイギリス海外学校協会 (British and Foreign School Society: BFSS) である。

当時BFBSと密接に連携しながら学校教育を進めていたBFSSなどからは、イギリス内外の学校が「ふさわしい養育環境にない」子どもたちを文明化する場所ととらえられていた。親のいないシエラレオネの子どもの解放奴隷たちはその象徴的な存在でもあり、学校教育による文明化の対象とされたのである。

イギリスは、奴隷貿易廃止の徹底を目指し、奴隷貿易船を拿捕してアフ

リカ人を解放した。これは、彼らにとって「文明化の使命」を果たすための行為であった。ただし、ここで見たように、解放されたアフリカ人たちにとって、それは、自分たちの出身地とは異なるシエラレオネに移送されることが前提となっていた。見知らぬ新しい場所であるシエラレオネやその周辺地域で徒弟となったり軍隊に入隊したりした後、さらに遠い西インドに送られる解放アフリカ人もいた。出身地で家族との突然かつ強制的な別離を経験した後も家族との再結合は、ほとんどの人にとってのぞむべくもなかった。奴隷船からの解放は、彼らにとっては、ただちに「自由になる」という意味での解放を決して意味しなかったし、家族との再会を約束するものでもなかった。母親との再会がなかったクラウザとて、それは偶然になった幸運でしかなかった。

むすびにかえて

イギリスのアボリショニスト、なかでも女性たちは、イギリス本国の人びとに向けて、奴隷たちが家族の離散を経験させられることや、女性の奴隷たちが母、妻として家庭責任を果たせないことを批判していた。アボリショニストが目指した奴隷貿易廃止の結果、解放された人びとが安定した家族生活を送れたかといえば、まったくそのような状況は生まれなかった。1807年にイギリスは奴隷貿易を廃止したが、フランスやスペインなどは奴隷貿易を継続していたため、西アフリカでは大規模な奴隷狩りが継続して行われており、その犠牲となったアフリカ人は変わらず突然の家族の離散を経験することになった。さらに、イギリスが奴隷貿易廃止を徹底するために海軍が行った違法な奴隷貿易取り締まりの結果としても、親子の強制的な別離は変わらず続いた。違法な奴隷貿易から解放され、シエラレオネなどに上陸した解放アフリカ人は、シエラレオネ周辺に定住するものもいたが、少なくとも1860年代ごろまで兵士や徒弟、契約労働者(シエラレオネでは、解放アフリカ人を徒弟とする制度は1848年に終了する³⁰⁾)という形で、西インドのイギリス領植民地に送られる人も少なくなかったからである。彼らは、奴隷船からの解放以後、出身地からさらに遠く離れた見知らぬ土地へと、再び移動させられたのである。結局、シエラレオネに移送されたほとんどの解放アフリカ人にとって、自分たちの出身地に帰還する

ことはかなわぬ夢であった。奴隷貿易という、アフリカン・ディアスポラの起点となった行為を禁止するためにイギリスが行った奴隷船の拿捕による奴隷の解放は、さらなるアフリカン・ディアスポラの起点となったに過ぎない。

解放アフリカ人を徒弟や兵士として事実上強制的に移動させる行為は、奴隷貿易や奴隷解放を他の国より早くに実現した「人道的な自由の守護者」としてのイギリス人というもののスローガンと実態の激しい乖離を示している。「家族」の価値に重点を置かれたの「文明化の使命」の実践は、イギリスにおいて周縁的な存在であった人びとにとっては、家族の離散の固定化でしかなかったのである。

* 本稿は、科研費基盤(B)「感情労働の地域・階級間比較にみる「近代家族」、フェミニズム思想の越境性とその限界課題番号(基盤B18H00702)」(代表:並河葉子)および科研費基盤(B)「グローバル化時代の子ども観の質的転換と子どもの権利保障政策に関する比較社会史研究(19H01649)」(代表:佐藤哲也)による成果の一部である。

註

- 1 カリブ海地域に広がるイギリス領の西インド諸島植民地を指す。
- 2 *An Act for the Abolition of the Slave Trade*, 47 Geo. III, c. 36, § 7.
- 3 HHC, TP, DTH ½, Zachary Macaulay to Thomas Ludlam, May, 1807. quoted in Anderson, Richard (2022), ‘Abolition’s Adolescence: Apprenticeship as ‘Liberation’ in Sierra Leone, 1808-1848’, *English Historical Review*, 137 (586), p. 768.
- 4 Ibid, p. 768. なお、ここで使われている現地の人びと (native) という言葉は、シエラレオネにもともと住んでいた人びとだけでなく、アフリカ系の人びと全般を指している。
- 5 *Liberated Africans* <<https://liberatedafricans.org/sources.php>> (2023年5月28日最終アクセス)。
- 6 Domingues da Silva, D., Eltis, D., Misevich, P., & Ojo, O. (2014), ‘The Diaspora of Africans Liberated from Slave Ships in the Nineteenth Century’, *Journal of African History*, 55 (3), pp. 347-369; Anderson (2022), pp. 763-764.
- 7 Schwarz, Suzanne (2012), ‘Reconstructing the Life History of Slaves’,

- History in Africa*, 39, p.176.
- 8 Anderson (2022), p. 769.
- 9 Eltis, D. and Engerman, S. L. (1992), ‘Was the Slave Trade Dominated by Men?’, *Journal of Interdisciplinary History*, xxiii, pp. 241-2; Lovejoy, P. E. (2006), ‘The Children of Slavery’, *Slavery and Abolition*, 37, pp. 197-217.
- 10 *The African Slave Boy: A Memoire of the Rev. Samuel Crowther, Church Missionary at Abeokuta, Western Africa*, Reprinted from the “Tracts for the Young”, London, pp. 27-29.
- 11 並河葉子 (1999) 「シエラレオネの黒人主教」指昭博編『イギリスであること』刀水書房所収。
- 12 Rev. Crowther, Samuel (1852), *The African Slave Boy: a Memoirof the Rev. Samuel Crowther*, wertheim & Macintosh.
- 13 *Liberated Africans* <<https://liberatedafricans.org/sources.php>> (2023年5月28日最終アクセス)；シエラレオネの解放アフリカ人とりわけ徒弟の扱いについては、Anderson (2022), pp. 772-788 および布留川正博 (2020) 『イギリスにおける奴隷貿易と奴隷制の廃止——環大西洋世界のなかで』(有斐閣、第4章) 参照のこと。ここでは、「徒弟」ではなく、(年季)奉公人という言葉を使っている。
- 14 *Liberated Africans* <https://liberatedafricans.org/event_details.php?EventID=3811> (2023年5月30日最終アクセス)。
- 15 Schwarz (2012), p. 184.
- 16 Diptee, Audra A. (2006) ‘African Children in the British Slave Trade during the Late Eighteenth Century’, *Slavery and Abolition*, 27-2, pp. 187, 190.
- 17 <<https://la.regeneratedidentities.org/project/DataFiles/AD000001/1820%20Marie%20V34112%20Register1%20SLR12598-12687.pdf>> (2023年5月30日最終アクセス)
- 18 Depitee (2006), p. 189.
- 19 Lovejoy, Paul (2006), ‘The Children of Slavery-the Transatlantic Phase’, *Slavery and Abolition*, 27-2, p. 200.
- 20 Howard, Allen (2020), ‘New Insights on Liberated Africans: The 1831 Freetown Census’, in Anderson, Richard & Lovejoy Henry (Eds.), *Liberated Africans and the Abolition of the Slave Trade, 1807-1896* (Rochester Studies in African History and the Diaspora). Boydell & Brewer, pp. 112-113.
- 21 Ryan, M. (2021), ‘It Was Necessary to Do Something With Those Women’: Colonial Governance and the “Disposal” of Women and Girls in Early Nineteenth-Century Sierra Leone’, *Gender & History*, pp. 1-20.
- 22 Anderson (2022), p. 789.

- 23 Schwarz, Swarz (2020) ‘The Impact of Liberated African “Disposal” Policies in Early Nineteenth-Century Sierra Leone’, in R. Anderson & H. Lovejoy (Eds.), *Liberated Africans and the Abolition of the Slave Trade, 1807-1896* (Rochester Studies in African History and the Diaspora, pp. 45-65). Boydell & Brewer, pp. 60-61.
- 24 Anderson (2022), pp. 772-788; 布留川 (2020) 前掲書。徒弟の期間は14年を超えないものとされている。
- 25 Domingues da Silva, Daniel, et.al. (2014), ‘The Diaspora of Africans Liberated from Slave Ships in the Nineteenth Century’, *The Journal of African History* 55-3, pp. 354-59.
- 26 Anderson (2022), pp. 788-789.
- 27 Swarz (2020), p. 207.
- 28 Proceedings of the Church Missionary Society, 1822.
- 29 並河葉子 (2009) 「イギリスにおける初等学校教育と聖書教育——啓蒙主義と福音主義の接点」、『ヨーロッパと啓蒙主義——その源流と超地域的展開および近代への射程』(神戸市外国語大学外国学研究所『外国学研究』73号)、27-39頁。
- 30 Anderson (2022), p. 789.

Summary

Abolition of Slave Trade and Family Separation: The Analysis of the Records of the Liberated Africans in Sierra Leone

Yoko Namikawa

Modern slavery is an inseparable institution from the separation of parents and children. British abolitionists severely criticized it during the anti-slavery movement in Britain. After its own abolition in 1807, Britain started campaign against international anti-slave trade. Many Africans were rescued by the Naval squadron from slave trading ships captured in the Atlantic as a part of the international anti-slave trade campaign led by Britain.

In recent years, online databases which show us the realities of the slave trade and slaves' lives in plantations have been developed. It has become clear that the Atlantic slave trade included a significant number of children. In this paper, relying on these online sources, I will consider the actual conditions of parent-child separation experienced by 'Liberated Africans' who were freed from slave trading ships and were taken to Sierra Leone. Sierra Leone, located in West Africa, was conceived by the Abolitionists who led the anti-slavery movement in Britain under the slogan of building a 'Province of Freedom', and colonial construction began in 1787. In 1808, it became a Crown colony and by the 1860s it was a center for receiving Liberated Africans. Sierra Leone was the place to try various means of 'civilizing mission' for Africans, and elementary education was considered quite important among them. Many elementary schools were established and Liberated Africans, not only children but adults, enrolled there in

preparation for the resettlement in Sierra Leone.

Although Liberated Africans, the target of the 'civilizing mission', were expected to accept the western family ideal, they were forced to be separated from their own family. Some Liberated Africans were then sent even further to the British West Indian colonies as apprentices, soldiers, etc. regardless of their own will. Here, the reality of the Liberated Africans in Sierra Leone is examined, with the separation of parents and children as a key concept.